



Title	道徳教育において「生命」を問うこと -中学校教科書の実態に即して考える-
Author(s)	関根, 宏朗
Citation	明治大学教職課程年報, 44: 29-38
URL	http://hdl.handle.net/10291/22378
Rights	
Issue Date	2022-03-26
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

道徳教育において「生命」を問うこと

—— 中学校教科書の実態に即して考える ——

関 根 宏 朗

1. 「生命」の教育の現在

わが国の教育シーンにおいて、生・老・病・死といった人間の「生命」の実相にふれる機会を学校現場に取り入れようとする問題意識が一般化して久しい。1970年代以降、高度経済成長を背景に複雑化する社会のなかで、日常生活から遠ざかっている生の現実¹にふれなおすことを掲げた教育プログラムが流行する。デーケンによるデス・エデュケーションの提唱¹やキューブラ＝ロスの「死の受容」についての仕事の紹介などを背景とした死生学の展開を経て²、とくに「阪神・淡路大震災が発生した1995年以降」にその「導入が本格的に検討されるようになった」³。先駆的な実践事例としては鳥山敏子(1941-2013)による鶏を捕まえて殺したり豚を丸ごと一頭食べる「授業」や⁴、金森俊朗(1946-2020)の教室に妊婦や末期がん患者を連れてきて話を聴く試みなどが知られている⁵。平成が始まる1989年には道徳の『学習指導要領』の柱の一つとして「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」という括りが取り入れられ、2002年に配布された副読本『心のノート』にも「いのちを感じよう」(小学校3・4年生)、「生命を愛おしむ」(小学校5・6年生)、「かけがえのない生命」(中学校)などのページが盛り込まれた。第一次安倍政権下の2006年に改正された教育基本法には、第二条(教育の目標)に「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」の一文があらたに追加されている。また学術的にも幼児教育や宗教教育、ホリスティック教育の分野などを中心にこうした教育への機運が高まり、1998年に学校メンタルヘルス研究者の近藤卓が中心となり結成された「子どもといのちの教育研究会」は2014年に「日本いのちの教育学会」へと発展し、雑誌『いのちの教育』を年次発行し現在に至っている。

ところで、少年犯罪の変質やいじめ自殺問題さらには2011年3月11日の東日本大震災の影響などを受けてこの「生命」の教育にまさに現在の意義を認める声がある一方で⁶、それらのテーマを教育の狭い言語で語りなおすにあたっては多くを取りこぼしてしまうのではないかとする批判的な指摘もある。人間性心理学者で僧籍ももつ坂井祐円は、あるエッセーで以下のように述べている。

「いのちは本来、対象化することができず、分析も不可能である。…いのちは教えることができない。ただいのちから教えられるのみである。そうだとすれば、「いのちの教育」とはいったい何なのだろう。はっきり言ってしまえば、人間の傲慢ではないだろうか。…いのちが教育として成り立つことがあるとすれば、それはいのちが私を生かしていると感じるときである。」⁷

ここで坂井は、生命の根源的な奥行きを対象化しようとする教育の欲望にたいし深く自戒を加えている。同様の観点からホリスティック教育研究者の河野桃子は「目的のための手段」という枠組みに落

とし込め切れないうちに、いのちの尊厳があるのではないだろうか」と問い、「自分の孫に「いのちの大切さ」を教えるために死ぬ祖父はいないのであり、“偶然に”接した祖父の死を前に、孫が、身をもって何かを受け取る場所に「いのちの大切さ」の学びは生起するのである」という示唆的な例示をおこなっている⁸。たしかにわれわれはいつも偶発的、後発的に生・老・病・死をめぐる生命の問題に出逢い、そこで何らかの気づきを得る（かもしれない）。とするならば、学校教育という設計的な視座に支えられる営みのうちにあつて、生と死の問題を「目的 - 手段関係」のうちに切り詰めてしまうことなしに教えることは、はたしてできるのか。この問題を考えるにあたり本稿では、考察の手掛かりとして現行の道徳科の検定教科書に注目する。道徳教育において「生命」をめぐる問題がどのように問われているのか、また問われるべきか、あらためて再考を加えたい。

まず次節では、『学習指導要領』の内容項目〔生命の尊さ〕に該当する教材資料の布置を確認する。もちろん教科書の内容の配分がそのままカリキュラムを規定すると見るのはやや早計かもしれないが、しかし学校教育法第34条および第49条そして第62条において「文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない」旨が明記されており、小学校・中学校・高校においては検定教科書の使用義務が存在する。各教科の指導において教員は検定教科書の内容を無視して授業を進めることはできないのである。日本の教科書使用義務を「世界でも稀有」であるという教科教育学研究者の鶴田敦子は、戦前の「国定教科書」以来「教科書を絶対的なものとみなし、教科書に基づいて授業を進めることを当然とみなす意識は、戦後七〇年を経た今もひきずっている」点を批判的に指摘している⁹。

もともと、学校教育法第34条第4項においては「教科用図書・以外の教材で、有益適切なものは、これを使用することができる」ことについて但し書きが付されてもいる。今般の道徳教科書を推進した中心的なひとりである教育史研究者の貝塚茂樹は、道徳教科書により「教える内容の幅が規定され、「窮屈に」なるのではないか、という心配」にたいして「他の教科と同じように副読本など補助教材を使用できることには変わりはなく、道徳教科書が他の教科と比べて「窮屈」になる特別な理由は見当たらない」と反論しているが¹⁰、いずれその論理においても「他の教科と同じように」道徳の授業内容が検定教科書によって方向づけられていることは間違いない。

2. 道徳科指導における「生命」の位置づけ：中学校検定教科書の内容構成から

現在、「特別の教科 道徳」の『学習指導要領』（2017年3月告示）の内容項目は「A 主として自分自身に関すること」の5項目、「B 主として人との関わりに関すること」の4項目、「C 主として集団や社会との関わりに関すること」の9項目、「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の4項目、計22の単元から成っている¹¹。いわば自己・他者・社会・自然というひとつの同心円的な広がりの中にさまざまな単元が配置されているわけだが、本稿で考察の対象とする「生命」についての視点は直接的にはこの四番目「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」のなかに位置づけられている。中学校教育課程におけるその具体的な内容は以下のとおりである¹²。

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

〔生命の尊さ〕

生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

〔自然愛護〕

自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること。

[感動、畏敬の念]

美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。

[よりよく生きる喜び]

人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見いだすこと。

ひとつ前の2007年訂版の『学習指導要領』（2008年3月告示）では、この[生命の尊さ]についての項目はよりシンプルに「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重すること」という表現であり¹³、内容項目が「四つの視点」ごとに整理された1989年改訂以降、1998年、2003年の改訂と、そのまま同じ表現がとられていた。だが現行のものでは以前までの表記をベースにしながら新たに「その連続性や有限性なども含めて」という表現が追加され、また後半の節の「自他の」という修飾語がカットされている。これは自他という狭い範囲を越えて、より普遍的・一般的な意味での生命の尊重が展望されていることを示唆しているのだろうか。なおこの「連続性」および「有限性」の概念が意味するところについて、文科省の『学習指導要領 解説』では「生命にいつか終わりがあること、その消滅は不可逆的で取り返しがつかないこと（有限性）、生命はずっとつながっているとともに関わり合っていること（連続性）」との具体的な言い換えがなされており¹⁴、「その連続性や有限性」とはすなわち「生命の尊さの連続性や有限性」ではなく「生命の連続性そして生命の有限性」を指すものであることがわかる。生命そのものの具体的な特徴とともにそのかけがえのなさを「理解」させることへの期待がここに示されている¹⁵。

ところで上述のように22の単元項目から成る道徳の教科内容であるが、じつはこれらの項目の扱いにはかならずしも同じ配分の重さが割り当てられているわけではない。実際、各教科書会社から出版されている検定教科書の教材の比重を見ると、そこにはかなりの量的なばらつきを確認することができる。

付表1 各会社ごとの中学校道徳科教科書（2020年2月検定）の傾向・所収教材数

出版社	教科書名	ページ数	別冊付録	執筆者・編著者クレジット	大学教員比率	教材数
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉1	176	「学びの記録」4頁	永田繁雄ほか33名	38.24%	35
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉2	188	「学びの記録」4頁	永田繁雄ほか33名	38.24%	35
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉3	188	「学びの記録」4頁	永田繁雄ほか33名	38.24%	35
教育出版	中学道徳1 とびだそう未来へ	208	「道徳の学びを振り返ろう」4頁	林泰成・柳沼良太ほか23名	43.48%	28+7
教育出版	中学道徳2 とびだそう未来へ	192	「道徳の学びを振り返ろう」4頁	林泰成・柳沼良太ほか23名	43.48%	28+7
教育出版	中学道徳3 とびだそう未来へ	192	「道徳の学びを振り返ろう」4頁	林泰成・柳沼良太ほか23名	43.48%	28+7
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を見つめる1	180	追加資料25頁+「学習の記録」20頁	横山利弘・七篠正典・柴原弘志ほか18名	42.86%	35
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を考える2	164	追加資料25頁+「学習の記録」20頁	横山利弘・七篠正典・柴原弘志ほか18名	42.86%	35
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分をのぼす3	160	追加資料25頁+「学習の記録」20頁	横山利弘・七篠正典・柴原弘志ほか18名	42.86%	35
東京書籍	新しい道徳1	184	「自分の学びをふり返ろう」3頁 ホワイトボード・心情円	渡邊満・押谷由夫ほか61名	66.67%	31+4
東京書籍	新しい道徳2	192	「自分の学びをふり返ろう」3頁 ホワイトボード・心情円	渡邊満・押谷由夫ほか61名	66.67%	31+4
東京書籍	新しい道徳3	192	「自分の学びをふり返ろう」3頁 ホワイトボード・心情円	渡邊満・押谷由夫ほか61名	66.67%	31+4
日本教科書	道徳 中学校1 生き方から学ぶ	192	なし	白木みどりほか21名	19.05%	22+11
日本教科書	道徳 中学校2 生き方を見つめる	192	なし	白木みどりほか21名	19.05%	22+12
日本教科書	道徳 中学校3 生き方を創造する	192	なし	白木みどりほか21名	19.05%	22+7
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる1	191	「道徳ノート」40頁	吉澤良保・越智貢・島恒生ほか35名	57.14%	35
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる2	191	「道徳ノート」40頁	吉澤良保・越智貢・島恒生ほか35名	57.14%	35
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる3	191	「道徳ノート」40頁	吉澤良保・越智貢・島恒生ほか35名	57.14%	35
光村図書	中学道徳1 きみがいちばんひかるとき	184	「学びの記録」見開き6頁	杉中康平・田沼茂紀ほか24名	61.54%	30+5
光村図書	中学道徳2 きみがいちばんひかるとき	192	「学びの記録」見開き6頁	杉中康平・田沼茂紀ほか24名	61.54%	30+5
光村図書	中学道徳3 きみがいちばんひかるとき	192	「学びの記録」見開き6頁	杉中康平・田沼茂紀ほか24名	61.54%	30+5

付表1にあるとおり¹⁶、各会社の道徳科教科書に収められた教材資料の数は予備教材も含めておよそ35であり、これは学校教育法施行規則別表第二（第七十三条関係）に定められた規定授業回数と一致する。すなわち一週一回の授業でひとつずつ教科書の教材資料にあたり、年間をとおしてすべての範囲をカバーしていくという見通しのもとに紙面が構成されている。しかし実際の教科書の内訳をみるならばそこには複数の教材が充てられているいわば「人気」の内容項目と、一年のうちにふれられるのがおそらく一度きりの項目とが存在し、その扱いの差は歴然であることがわかる。教科化当初の道徳科教科書（2018年3月検定）の内容項目の傾向を分析した星裕によれば、中学校においては「B「友情、信頼」、D「生命の尊さ」、D「よりよく生きる喜び」が上位3つであり…、全体的にどの出版社も多くの教材を配当し、とくに「D「生命の尊さ」は、全8社が上位3位以内に含め」ているほど複数の教材で重視されていたという¹⁷。星は出版社ごとの一定の独自性を認めつつも、こうした教科書の全体的な傾向性には文部科学省によって「道徳教育の指導の重点化を図ることが求められた内容」とのかかわりがあったのではないかとの見立てを示している¹⁸。

付表2 現行の中学校道徳科教科書（2020年2月検定）における学習指導要領への対応資料数

出版社	教科書名	各項目に対応する資料数																					
		A					B					C					D						
		【自主、自律、自由と責任】	【即興、即断】	【向上心、感性の伸長】	【希望と勇氣、克己と強い意志】	【真理の探究、創造】	【思いやり、感謝】	【礼儀】	【友情、信頼】	【相互理解、寛容】	【道徳精神、公徳心】	【公正、公平、社会正義】	【社会参加の精神】	【勤労】	【家族愛、家庭生活の充実】	【よりよい学校生活、集団生活の充実】	【郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度】	【我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度】	【国際理解、国際貢献】	【生命の尊さ】	【自然愛護】	【感動、畏敬の念】	【よりよく生きる喜び】
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉1	2	2	1	2	1	2	1	3	1	2	2	1	1	1	2	1	1	2	3	1	1	2
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉2	2	2	1	1	2	2	1	2	2	2	1	2	1	1	2	1	1	1	3	2	1	2
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉3	2	2	1	1	2	3	1	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	3	3	1	1	2
教育出版	中学道徳1 とびだそう未来へ	2	2	1	2	1	3	1	2	2	1	1	1	1	1	1	4	1	1	3	1	1	2
教育出版	中学道徳2 とびだそう未来へ	1	2	1	2	1	3	1	2	1	2	2	3	1	1	1	2	1	3	2	1	1	1
教育出版	中学道徳3 とびだそう未来へ	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	4	1	1	1	2	2	2	3	2	2	2
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を見つける1	3	1	1	2	1	3	1	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	3
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を考える2	3	1	1	2	1	3	1	2	1	2	2	1	1	2	1	1	1	1	3	1	1	3
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分をばさる3	3	1	1	2	1	3	1	2	1	2	2	1	1	2	1	1	1	1	3	1	1	3
東京書籍	新しい道徳1	2	2	1	1	1	3	1	2	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	4	1	1	2
東京書籍	新しい道徳2	2	2	1	1	1	2	1	2	2	2	2	2	2	1	1	1	2	1	4	1	1	3
東京書籍	新しい道徳3	2	2	1	1	1	2	1	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	3	4	1	1	2
日本教科書	道徳 中学校1 生き方から学ぶ	1	1	2	1	1	2	1	3	2	3	3	3	1	2	1	2	1	1	2	1	1	2
日本教科書	道徳 中学校2 生き方を見つめる	2	1	2	1	2	1	1	3	3	2	2	2	2	1	1	2	2	1	2	1	1	3
日本教科書	道徳 中学校3 生き方を創造する	2	1	1	2	1	2	1	3	1	2	2	2	1	2	1	1	1	2	3	1	1	3
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる1	2	1	1	1	1	2	1	3	1	2	2	2	2	1	1	2	1	2	3	1	1	2
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる2	2	1	1	1	1	2	1	3	1	2	2	2	2	1	1	1	2	2	3	1	1	2
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる3	2	1	1	1	1	2	1	2	1	2	2	3	2	1	1	1	2	2	3	1	1	2
光村図書	中学道徳1 きみがいちばんひかるとき	2	1	1	1	1	3	1	2	2	2	2	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	2
光村図書	中学道徳2 きみがいちばんひかるとき	2	2	2	2	1	1	1	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	2	3	1	1	2
光村図書	中学道徳3 きみがいちばんひかるとき	2	1	2	2	1	2	1	1	3	2	2	1	2	1	1	1	1	1	3	1	1	2
平均		2.05	1.43	1.19	1.43	1.14	2.24	1	2.24	1.62	1.9	1.86	1.81	1.38	1.24	1.14	1.43	1.29	1.62	3	1.1	1.05	2.24

項目「生命の尊さ」が重視されるこうした傾向は直近の2020年2月の改訂においても同様である。性教育の研究でも名高い池谷壽夫は前回（2018年3月）と今回（2020年2月）の中学校道徳科の検定教科書の内容の加除につき仔細に整理をし、文科省の読み物資料集に出所をもつ定番教材が変わらずに共通して所収されている事実を確認するとともに、一部の教科書会社で見られた「入れ替えの教材には、日本の伝統および生命や自然に関する事項のものが目立つ」旨を指摘している¹⁹。実際、付表2に示すように現行の道徳科教科書の項目割当の実数を見ると²⁰、たとえばB「礼儀」についてはすべての教科書会社においてすべての学年で年に1篇ずつしか教材が用意されていないのにたいしてD「生命の尊さ」の内容項目を扱う教材数は平均で3篇を数え、全22の内容項目のなかでずば抜けてトップの配分である。なかでも採択率1位の東京書籍では²¹すべての学年において4篇ずつ当該項目に対応する教材が

準備されており、相当な力の入れようであることが見て取れる。ちなみにこれは偶然かもしれないが、編著者における研究者の比率がもっとも高い東京書籍（66.67%）の教科書が同項目を手厚く扱っている一方で、研究者の比率がもっとも低い日本教科書（19.05%）では相対的にその扱いが一番少ないという興味深い事実も確認できる²²。

3. 『学習指導要領』の項目？[生命の尊さ]を主題とする道徳教材の実態と傾向

それでは具体的にどのような教科書教材が教室で実際に用いられているのだろうか。付表3はわが国の中学校道徳教科書における内容項目D [生命の尊さ]に対応する教材資料の一覧であり、各教科書会社による『学習指導要領』への対照表に基づいて同項目を直接扱う教材とされたものを括りだしたものである²³。『新・中学生の道徳 明日への扉』（学研教育みらい）と『中学道徳 あすを生きて』（日本文教出版）のみ、教材を用いるにあたって具体的な「主題名」も付記されていた。

付表3 各教科書で項目 [生命の尊さ] に対応するものとして選ばれた教材

出版社	教科書名	教材名	教材著者	主題名	教材の種類	主な登場人物	テーマ
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉1	あなたに	編集委員会	かけがえない生命	創作物語	娘を生んだ時のことを回想する母	生
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉1	たとえぼくに明日はなくても	遠藤謙	輝かせる命	ノンフィクション	脳卒中で右脳を失った若者 石川正一	病
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉1	捨てた、未来	中西乃子	輝かせる命	ノンフィクション	虐待を受けていた母と子	生
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉2	そこにいるだけでいい	岸田美智子	生かされることの意味	評論	完成したる母と幼少子	生・死
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉2	ブラック・ジャック 二人の黒い医者	手塚治虫	生かされることの意味	漫画	安楽死を希望する患者とブラック・ジャック医師	生・死
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉2	絶えてはならない 種方法論	編集委員会	かけがえない生命	伝記	天然痘予防に尽力した種方法論	病
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉3	余命ゼロ 命のメッセージ	遠藤謙	支え合う命	ノンフィクション	余命宣告を受けたつづ学校で講演活動を行う道徳科担任	生・病
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉3	忘れられないご馳走	宮澤幸	命の重さ	自伝的なふりかえり	闘われ食べられたヤギと泣きながらそれを美味しく食べた私	生
学研教育みらい	新・中学生の道徳 明日への扉3	懐介の決意	甲斐聡	自然の生命の尊重	創作物語	自ら臓器移植を希望した息子とそれを受けた父	生・病・死
教育出版	中学道徳1 とびだそう未来へ	あなたに うまれた ひ	デブラ・フレイジャー	記憶なし	詩	あなた	生
教育出版	中学道徳1 とびだそう未来へ	いのちを尊ぶ	菊田文夫	記憶なし	評論	ペット、家畜、さまざまな動物たち	生
教育出版	中学道徳1 とびだそう未来へ	よく生きること、よく死ぬこと	沼野由美	記憶なし	ノンフィクション	がん進行とともに哲学的な思考を重ねた少女ヨッチャン	生・病・死
教育出版	中学道徳2 とびだそう未来へ	たったひとつのたからもの	加藤浩美	記憶なし	ノンフィクション	ダウン症児に生まれ6年生をきた子どもとその両親	生・病・死
教育出版	中学道徳2 とびだそう未来へ	国境なき医師団・貴戸陽子	NHK「探外探案ようこそ先駆」	記憶なし	ノンフィクション	日本人医師として初めて国境なき医師団に参加した貴戸陽子	生・病・死
教育出版	中学道徳3 とびだそう未来へ	ハグジと少女	編集委員会	記憶なし	写真、ロボ	スウェーデンの内職地区で活動した写真家ケヴィン・カーター	生・死
教育出版	中学道徳3 とびだそう未来へ	いのちのプロジェクト	前田実	記憶なし	ノンフィクション	殺処分された動物の骨を肥料にする活動を始めた高校生	生・死
教育出版	中学道徳3 とびだそう未来へ	家族の思いと意思表示カード	編集委員会	記憶なし	創作物語	臓器提供を希望していた脳死状態の大学生とその家族	生・病・死
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を見つめる1	あなたの「生きようとする力」	鈴木せい子	記憶なし	詩	新生児	生
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を見つめる1	輝かせる命	河合健雄	自伝的なふりかえり	ノンフィクション	骨折し安楽死させられる馬とその飼い主の兄弟	生・死
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を見つめる1	語りかける目	警察官の手記	記憶なし	ノンフィクション	阪神大震災で母を亡くした少女	生・死
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を見つめる2	燃え盛る星	佐川正一	記憶なし	ノンフィクション	脳卒中で右脳を失った若者 石川正一	生・病
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を考える1	天候の舞い降りた朝	石真珠子	記憶なし	創作物語	母を亡くした高校生の僕	病・死
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を考える2	看取る医師	甲野国英	記憶なし	ノンフィクション	人生の最期を自宅で過ごす選択をした患者と訪問医師	病・死
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を考える2	誰かのために	梅田寛	記憶なし	ノンフィクション	緩和ケア病棟に勤務する医師、末期がん患者とその娘	生・病・死
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を考える3	ドナー	新聞記事・編集委員会	新聞記事	新聞記事	臓器提供に反対する主婦と賛成する大学講師	病・死
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分を考える3	高砂丸とボトマック川のこと	編集委員会	記憶なし	事実に基づいた物語	漂流飛行機の生存者たち、人命救助で命を落とした船乗り	生・死
東京書籍	新しい道徳1	あなたにほかに	みつはしちかこ	記憶なし	詩	不器用に生きているあなた	生
東京書籍	新しい道徳1	いのちって何だろう	徳永達	記憶なし	評論	医師 徳永達	生・病
東京書籍	新しい道徳1	決断！ 腎臓バンク移植第一号	NHK「プロジェクトX」制作班	記憶なし	ノンフィクション	ドナー登録者 田中重晴	生・病
東京書籍	新しい道徳1	死に降る星	石真珠子	記憶なし	事実に基づいた物語	16歳で亡くなった親友 幸雄	病・死
東京書籍	新しい道徳2	絆の連鎖	甲斐倫美	記憶なし	ノンフィクション	ホスピスでボランティアをする若者たちとある末期がん患者	病・死
東京書籍	新しい道徳2	生徒作文	生徒作文	記憶なし	事実に基づいた詩	中学生と新生児の母	生
東京書籍	新しい道徳2	三ついのちについて考える	編集委員会	記憶なし	争論のまとめ	いのちについて様々な考えを6人の生徒	生・老・病・死
東京書籍	新しい道徳2	書きなかつた遺書	八木孝宏	記憶なし	ノンフィクション	自殺願望を訴える生徒たち	死
東京書籍	新しい道徳3	生まれてきてくれて、ありがとう	東京府教育委員会	記憶なし	評論	助産師の私	生
東京書籍	新しい道徳3	くちびるに歌をよんで	山本有三	記憶なし	創作物語	合唱して生き抜いた海難者隊での漂流者達	生・病・死
東京書籍	新しい道徳3	人間の命とは人間の命の重さ・大切さを知る	編集委員会	記憶なし	ノンフィクション	尊厳死をめぐる裁判になったレイン・クワンラン	生・病・死
東京書籍	新しい道徳3	たとえぼくに明日はなくても	遠藤謙	記憶なし	ノンフィクション	脳卒中で右脳を失った若者 石川正一	病
日本教科書	道徳 中学校1 生き方から学ぶ	過去からのメッセージ	記憶なし	記憶なし	創作物語	山間のおきな村に住む祖母	生
日本教科書	道徳 中学校1 生き方から学ぶ	誰かのために	梅田寛	記憶なし	ノンフィクション	緩和ケア病棟に勤務する医師、末期がん患者とその娘	生・病・死
日本教科書	道徳 中学校2 生き方を見つめる	コンスタンチン君 命のリレー	NHK「プロジェクトX」制作班	記憶なし	ノンフィクション	サハリンから北海道まで国境を越え緊急搬送された少年	生・病
日本教科書	道徳 中学校2 生き方を見つめる	キミおぼあちゃんの輝	文化科学者	記憶なし	伝記	儒学者 廣瀬淡窓	生・病
日本教科書	道徳 中学校3 生き方を創造する	ひさの星	斎藤隆介	記憶なし	創作物語	自己犠牲により男児の命を救った少女ひさ	生
日本教科書	道徳 中学校3 生き方を創造する	臓器移植をめぐる命と心	不明	記憶なし	評論	NHK「家族が脳死になったとき」出演者ら	生・病・死
日本教科書	道徳 中学校3 生き方を創造する	いのちの絆	大石邦子	記憶なし	自伝的なふりかえり	二十二歳のときに事故で半身まひになった作家 大石邦子	生・病
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて1	ぼあを生きる	編集委員会	ともに生きる	創作物語	95歳で亡くなった曾祖母	老・死
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて1	あふれる愛	沖野弘	生まれてきた大切な命	伝記	マザー・テレサ	生・死
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて1	ゆらゆら生きていてくれてありがとう	たかいづつ	つながる生命	ノンフィクション	阪神大震災で亡くなった息子と双子の妹	死
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて2	最後のパートナー	西田深雪	支え合う生命	ノンフィクション	引退音楽家の養育ボランティア	生・老
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて2	体験「アス」をとおして	飯倉加奈	生徒作文	生徒作文	アス体験をした中学生と教師	生
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて2	命を見つめて一線魂さんの六百四十六日	横尾和彦・前田隆	懸命に生きる	ノンフィクション	小児がんで余命宣告を受けた少女、擁護陣	生・病・死
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて3	エリカ-奇跡のいのち-	ルース・バンダー、ジー	生きていることの意味	事実に基づいた物語	強制収容所に向かう列車から外へ投げられ生き延びた赤ん坊	生・死
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて3	臓器ドナー	毎日新聞「声」	自然の生命の尊重	新聞記事	臓器提供に反対する主婦と賛成する大学講師	病・死
日本文教出版	中学道徳 あすを生きて3	希望	佐々木莉乃	かけがえない生命	生徒作文	東日本大震災を経験した中学生と養育された祖母	生・死
光村図書	中学道徳1 きみがいちばんひかるとき	ひまわり	かどまどか	記憶なし	ノンフィクション	東日本大震災で家族を亡くした陸上自衛官	死
光村図書	中学道徳1 きみがいちばんひかるとき	捨てられた悲しみ	編集委員会	記憶なし	ノンフィクション	大腸を収容・殺処分する保健所で働く女性	生・死
光村図書	中学道徳1 きみがいちばんひかるとき	エルムおばあさんからの「最後の贈りもの」	大塚敬子	記憶なし	自伝的なふりかえり	日本人フォトジャーナリストとあるアメリカ人末期がん患者	生・死
光村図書	中学道徳2 きみがいちばんひかるとき	命が生まれるそのとき	編集委員会	記憶なし	ノンフィクション	出産を機に学真家 葉庭あつき	生
光村図書	中学道徳2 きみがいちばんひかるとき	つながる命	編集委員会	記憶なし	新聞記事	臓器提供を受け臓器移植する兄弟の両親	生・病・死
光村図書	中学道徳2 きみがいちばんひかるとき	泣き止まない涙	内田誠太郎	詩	詩	亡くなったあとの祖父とその孫	生
光村図書	中学道徳3 きみがいちばんひかるとき	あの日 生まれた命	NHK取材班	記憶なし	ノンフィクション	東日本大震災当日に生まれた新生児とその母親	生
光村図書	中学道徳3 きみがいちばんひかるとき	命の選択	編集委員会	記憶なし	新聞記事	尊厳死を望んだらなくなった祖父とその孫、中学生らの新聞記者	生・死
光村図書	中学道徳3 きみがいちばんひかるとき	命と命をきく	中村桂子	記憶なし	争論のまとめ・評論	「命」について考えるあなた	生・死

並びを見てもまず全体としてノンフィクションや新聞記事、自伝的なふりかえりなど、事実にもとづいた内容の資料の多さが目に付く。全63の資料のなかで、完全な創作資料は詩も含めわずか12篇である。詩の形式は教育出版の1年生、廣済堂あかつきの1年生、東京書籍の1年生・2年生、光村図書の

2年生にそれぞれ1つずつ配されており、比較的若い学年で採用されていることがわかる。他方で新聞記事は廣濟堂あかつきの3年生、日本文教出版の3年生、光村図書の2年生・3年生と、現実のケースに即したテーマの具体性に関連してか、どちらかというが高学年で好まれる傾向が読み取れる。

内容としては表の「主な登場人物」の欄に記したとおり、7社すべてにおいて医師・助産師など医療従事者がしばしば登場することを指摘できる。また同様にすべての教科書会社で末期がん患者、難病患者らが複数回取り上げられている。さらにこの「生命の尊さ」の項目とのかかわりにおいて、阪神大震災についての教材が2つ、東日本大震災についての教材が3つ収められていることも特徴的であろう。また人間の「生命」について考えさせる教材以外に動物について扱ったものとしては教育出版と学研で2篇ずつ、日本文教出版、廣濟堂あかつき、光村図書で各1篇ずつの計7篇あった²⁴。なお異なる教科書会社により同じ著者の資料が重ねて採用されるケースもあり、たとえば筋ジストロフィー患者の石川正一についての文章が学研、廣濟堂あかつき、東京書籍の3社の教科書に収録されているほか、鎌田實医師によるエッセーや臓器移植をめぐる朝日新聞の同じ投書がそれぞれ2社の教科書に収められている。臓器移植あるいは尊厳死の是非については、学研の3年生、教育出版の3年生、廣濟堂あかつきの3年生、東京書籍の1年生・3年生、日本教科書の3年生、日本文教出版の3年生、光村図書の2年生と全ての教科書会社で取り上げられているテーマであり、光村図書を除く6社では最終学年に配当されている。これはわが国の臓器移植法において臓器提供の有効意思表示が民法上の遺言可能年齢に準ずるかたちで「15歳以上」と定められていることと、おそらく無関係ではないだろう²⁵。

それでは、いわば「生命」の臨界を問うこうしたテーマはどのようなかたちで「教材」化されているのだろうか。たとえば中学校3年生を対象とする『自分をのぼす 3』（廣濟堂あかつき）および『あすを生きる 3』（日本文教出版）で重ねて収録されている朝日新聞の投書は、以下のふたつの対照的な「声」を素材として子どもたちに示し思考を促すものである。ひとつは「もしも私が脳死になったら、私の臓器提供する？」と問いかける小学4年生の我が子にたいして「親にとり子供は何よりも大切なもの。脳死というのは、脳の働きが停止し、やがて亡くなるという状態だけど、まだ息をしているし心臓も動いている。そんなあなたから内臓を取り出すなんて、お母さんは出来ない」と真摯に答える30代女性・主婦の意見。もうひとつは、実際に移植医療に携わるなかで脳死は死であるとの認識を得て、「もし、私が脳死となり、私の臓器がどなたかに新しい人生を与える可能性があるならば、妻には秘密の場所から意思表示カードを出して私の臓器提供の意思を承諾して欲しい」とする40代男性・医学部講師の主張である²⁶。ここで自らの思いに迷いや葛藤を含みながらもどちらかという臓器移植に反対の立場と同じく賛成の立場をその背景とともに考えながら、これらの教科書では「脳死を人の死とみなすのはなぜだとあなたは考えるか。また、それについてどう思うか」とか²⁷、「自分が臓器を提供するとした場合も含め、その理由を考え、話し合おう」といった具合に²⁸、授業での話し合いのトピックがひとつの「論争的課題 (controversial issues)」として提示される。

だが本来やわらかな奥行きをともなった「生命」に係る問題群を学校教育の明快かつデジタルな言語で語りなおすこうした「教材」化にあっては、すでに第1節でみたように、その本質を「目的 - 手段関係」のうちに切り詰めてしまう乱暴さが拭えない。さらに言えば、学習内容が副次的にもたらしちゃう「教育」効果についても重ねて注意が必要であるだろう。高校教員としてのキャリアをもつ生命倫理学者の大谷いづみは、「尊厳死」という視点がいわゆる姥捨て山問題に結びついてしまったり「出生前診断」が結果的に胎児の選別へと行き着いてしまっている現状を指摘しながら、「いのちの教育」の前でもただ感傷的になるのではなく、その個別的なケースをとりまく状況を良く見ながら情報を集めることが必要だと論じている。

「(引用者補足、「生と死」について教育現場で扱われる際、それはいつも価値中立的ではなく)たとえば米国オレゴン州で医師幫助自殺を選んだ人々の多くが高学歴の白人層であるという実態には触れられないまま、自己決定の原理に基づく「安楽死・尊厳死」の是非がディベートされ、安楽死の公的容認が早くから制度化されたオランダで、それゆえに苦痛緩和治療が遅れているという指摘などには触れられないまま、自己決定の原理に基づく「安楽死・尊厳死」の是非がディベートされているのである。…その「自己決定」をとりまく社会構造が問われ、自己決定の原理が持つ文脈依存性が問われなければ、議論それ自体が、生と死を論理で持てあそぶ知的遊戯にしかない。」²⁹

大谷にしたがえば、道徳の授業で「生命の尊さ」を扱うにあたりしばしば議論のテーマとして持ち込まれる倫理的な問題系は、決して価値中立的なものではない。より学校化していることが想定される「高学歴の白人層」が相対的に「医師幫助自殺を選んだ」という事実を示唆されているように、当の学習内容それ自体が知らず知らずのうちに子どもたちを方向付けてしまい、「ある特定の生と死の在り方のみを肯定し、そこから外れる存在を美しい、良き死へと誘導するような「語り」が立ち現れ」かねないという事実に我々はもっと敏感であらねばならない³⁰。臓器移植や尊厳死の是非につき教科書上の問いかけにしたがって熱心に議論を重ねるなかで、賛成・反対のどちらにシンパシーをもつかは別にして、ともするとときに極端なケースをも含んだ問題構成そのものを「教育」的に受け入れるコンテキストがそこに準備されてしまうかもしれない。あるいはメタ的で反省的な捉え返しを欠いて教科書の記述をそのままフォローしてしまうことで、ときに教材のうちに潜みこむ透明で恣意的な前提の偏りさえ共有されてしまいかねないのではないか——たとえば先に見た新聞投書においては、臓器移植に反対していた30代女性・主婦とそれに賛成していた40代男性・医師の意見について、意見そのものというよりもむしろその発言者の属性が読み手の子どもたちに（あるいはときに授業者にも）暗黙の偏ったメッセージを与えてしまうということはないか。

4. コンテキストの相対化をともなう「生命」へのまなざし

前節ではわが国の道徳教科書の内容構成を俯瞰するとともに、「是非を問う」ことがそれ自体もっているある種の「教育的」なリスクを先行する大谷いづみの仕事に導かれつつ確認した。だがじつのところ、こうした問題は何も生命倫理学のデリケートな問いに限られた話ではない。一例をあげよう。『道徳 中学校3 生き方を創造する』（日本教科書）で項目「生命の尊さ」に対応する教材として充当されている斎藤隆介著「ひさの星」は、ひさという秋田の純朴な少女が大雨のなか氾濫する川に落ちた男児を救い、その代わりに自分は水にのまれてしまうという物語であるが³¹、この教科書では物語のあと「あなたはひさの行動をどう思いますか？」という問いかけが「考え、話し合ってみよう そして深めよう」という見出しの下に投げかけられている。子どもたちは問いを受けて議論をおこなうなかで、おそらくはこの自己犠牲に殉じた少女の行いをより「道徳的」なものとして認めつつ、場合によっては犠牲的に自己を差し出さないことは「道徳的」ではないとのニュアンスをそこから引き取ってしまうかもしれない³²。けれども自己を投げ打って行動することがはたして『学習指導要領』で意図されていた「道徳」観とどこまで折り合うものなのか、あらためて考える必要があるだろう。授業者には教材テキストと一定の距離を取り、それを反省的・批判的にとらえ返す姿勢がなお求められているのではないか。

また前節で「生命の尊さ」に係る『学習指導要領』の項目文に「その有限性や連続性なども含めて」という言葉が挿入された旨を確認したが、この「連続性」を意識したあらたな教材群にも副次的な方向付けを招きうる暗黙の偏りが認められる。たとえば『中学生の道徳 自分をのぼす3』（廣済堂あかつき）

および『道徳中学校1 生き方から学ぶ』（日本教科書）に収められた鎌田實のエッセーでは、緩和ケア病棟にきた末期のスキルス胃がん患者の女性が診断された余命を越えて子どもの卒業を見届けた話が紹介され、医師の想いが以下のように綴られている。「お母さんの人生は四十年ちょっと、とても短い命でした。でも、命は長さじゃないんですね。お母さんはお母さんなりに精いっぱい、必死に生きて、大切なことを子供たちにちゃんとバトンタッチした」³³。長く患者の看取りにかかわりをもってきたこの医師の慈愛に満ちたメッセージは、しかし一方で子どもを産み育てる生が「ちゃんとバトンタッチ」していて、そうでない生はまるで「ちゃんと」していないかのような含みを持ってしまっていないだろうか。同様に『中学道徳2 きみがいちばんひかるとき』（光村図書）に収められた内田麟太郎の詩「泣きすぎてはいけない」で、亡くなった祖父が孫にたいして遺した言葉かけ——「おまえは大人になっていく 恋人ができて子供が生まれ孫が生まれる その子がとんぼを押さえ おまえを振り返る 自慢そうに白い歯を見せ そのときおまえは（アア）と心につぶやくだろう おじいさんからもらっていた命のバトンに」という散文は³⁴、自分から子、孫へとつながれる「命のバトン」のかけがえのなさを強調するあまりに、「恋人ができて子供が生まれ孫が生まれる」生の在り方をいわば唯一当然のライフコースとして前提・限定してしまっていないか³⁵。

付言すると、上記に例示した教科書群ではいずれも教材の文章に続いて「バトンタッチした「大切なこと」とはなんだろう」³⁶、「命のバトン」とはどのようなものだろう」³⁷といったように、バトンをつなぐ行為そのものを自明なものとしてディスカッションのための問いかけが付されていた。もちろん「生命の連続性」をエリクソンの「世代継承性（generativity）」の問題と重ねて理解し、さまざまにありうべき「生命」のつながりを時間軸のなかで捉えかえていくうえで、こうした教科書教材の内容をひとつの拠り所として議論を交わすことの意義は十分にある。けれどもむしろ大切なのは、教科書上に用意されている出来合いのディスカッションテーマを無批判・無前提に用いるのではなく、ときに教材の内容が拠って立つ地平そのものを相対化するような大括りの問いをぶつけ、またそこにつながるう気づきを子どもたちの声から周到に掬い取る構えではないか。教育哲学者のガート・ビースタはランシエールの仕事を引きながら、1849年にフランスで「出馬することのできない選挙に立候補した」女性、ジャンヌ・ドゥロワンの姿勢のうちに本当の意味での「政治的」主体の生成可能性を看取している³⁸。与えられた既存の枠組みをすべてカッコにいれ、共有されている前提そのものを大胆に問い返すドゥロワンの姿勢にこそ、ビースタは政治的公共性を織りなす自律主体のモデルをみた。本来的に予測不可能な意味の広がりとおもなう「生命」というテーマを（道徳）教育の場で扱うにあたっては、こうした与件なき主体化可能性へと向かう回路に開かれた授業者の感性がなお問われているのではないだろうか。

1 アルフォンス・デーケン『死を教える』メヂカルフレンド社、1986年。

2 Kübler-Ross, Elisabeth. *On Death and Dying*, New York: Simon & Schuster/Touchstone, 1969 = 『死ぬ瞬間』川口正吉訳、1971年、読売新聞社。cf. 進藤雄三「死と死別の社会学」『都市文化研究』第20号、大阪市立大学都市文化研究センター、2018年、92頁。

3 以上の経緯については、竹松志乃「日本におけるデス・エデュケーションについて：家庭で行われるデス・エデュケーションに関する一考察」『明治大学心理社会学研究』第1巻、2006年、27頁を参照。日本における死生学の歴史とその展開については、島菌進「わが国の死生学の現状」『現代のエスプリ』第499号、至文堂、2009年、136-143頁、が参考になる。

4 鳥山敏子『いのちに触れる：生と性と死の授業』太郎次郎社、1985年。同『豚まるごと一頭食べる』フレーベル館、1987年ほか。原発や屠殺など社会科学習的な問題意識からスタートした鳥山が徐々に実存的な関心を強めていった事実については、香川七海「1980年代における鳥山敏子の授業実践・再考：原発・屠殺・差別問題を起点として」『現代の社会病理』第31号、日本社会病理学会、2016年、39-57頁を参照。

- 5 金森敏朗『いのちの教科書 学校と家庭で育てたい生きる基礎力』角川書店、2003年。ほかにも群馬県の小学校教員、深沢久の、人体の成分分析表を細かく割り出して、「科学的に人間の値段をつけると、3000円です。文句のある人はいますか」と子どもたちに投げかけた挑戦的な道徳の授業や（cf. 井ノ口淳三『命の教育、心の教育は何をめざすか』晃洋書房、2005年、81頁以下）、鳥山実践に触発されて「育てて食べる」ことをねらいとして大阪の公立小学校で1990年代の初めにおよそ3年間ブタを飼育した黒田恭司の実践（黒田恭司『豚のPちゃんと32人の小学生』ミネルヴァ書房、2003年）、自ら余命わずかであるとの告知を受けた神奈川県の高校の校長、大瀬敏明が、自身の死に向かう経験を子どもたちにそのまま伝えた「いのち」の語り（大瀬敏昭『輝け！いのちの授業—末期がんの校長が実践した感動の記録』小学館、2004年）などがメディアでの紹介もありよく知られている。とくに黒田実践にたいしては子どもたちの参加的なかかわりを丹念に取材したドキュメンタリー番組が1993年に第31回「ギャラクシー奨励賞」と第17回動物愛護コンクールの「内閣総理大臣賞」を受賞し（黒田、前掲書、189頁）、その後2008年に前田哲監督、妻夫木聡主演で「ブタがいた教室」として映画化され話題となった。その「教育」の成否には約30年を経た今でもなおさまざまな哲学者・教育学者が賛否両論を寄せているが、これについてはいずれ別稿を用意したいと考えている。
- 6 たとえば、渡邊満「中学校の道徳教育において〈いのち〉の教育をどのように実践するか（1）」『岡山大学教師教育開発センター』第6号、2016年、106-107頁。梶田叡一『〈いのち〉の教育のために』金子書房、2018年など。
- 7 坂井祐円「いのち教育はどこに向かうのか？」『死生学年報』第17号、東洋英和女学院大学死生学研究所、2021年、129-130頁、傍点原文。
- 8 河野桃子「『いのちの大切さ』を教えるには？」井藤元編『ワークで学ぶ教育学』ナカニシヤ書店、2015年、209頁。
- 9 鶴田敦子「道徳科の授業および教科書にどう向き合うか」『歴史地理教育』889号、2018年、54-55頁。同論で鶴田は日本国憲法に立ち返り「道徳」の多様な価値をとら返していく必要を説いている。
- 10 貝塚茂樹「道徳教科書のあり方を考える」押谷由夫ほか編『道徳の時代が来た！』教育出版、2013年、63頁。
- 11 具体的な項目は下記の通り。すなわち、Aは[自主、自律、自由と責任]、[節度、節制]、[向上心、個性の伸長]、[希望と勇気、克己と強い意志]、[真理の探究、創造]。Bは[思いやり、感謝]、[礼儀]、[友情、信頼]、[相互理解、寛容]。Cは[遵法精神、公德心]、[公正、公平、社会正義]、[社会参画、公共の精神]、[勤労]、[家族愛、家庭生活の充実]、[よりよい学校生活、集団生活の充実]、[郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度]、[我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度]、[国際理解、国際貢献]。Dは[生命の尊さ]、[自然愛護]、[感動、畏敬の念]、[よりよく生きる喜び]。道徳の『学習指導要領』に含まれるさまざまな術語を計量的に分析した仕事に、藤橋宙生「『特別の教科 道徳』に見られる価値観の計量的分析—『中学校学習指導要領 解説 特別の教科 道徳』のテキストマイニングを通して—」『明治大学教育会紀要』第14号、2022年、13-24頁、がある。
- 12 『中学校学習指導要領（平成29年告示）』文部科学省、2017年、156頁。ちなみに小学校の同項目は以下のとおりである。「〔第1学年及び第2学年〕生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。〔第3学年及び第4学年〕生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること。〔第5学年及び第6学年〕生命が多く、生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること」（『小学校学習指導要領（平成29年告示）』文部科学省、2017年、169頁）。
- 13 『中学校学習指導要領解説 道徳編（平成20年9月）』文部科学省、2008年、143頁。
- 14 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』文部科学省、2018年、63頁。なお同じ箇所ではもうひとつ「偶然性」という概念が「それぞれの生命体が唯一無二の存在であること、しかもそれらは全て生きているということにおいて共通であるということ、自分が今ここにいることの不思議（偶然性）」と説明されているが（同頁）、これはおそらく同項目の文章の「かけがえのない生命」という部分の説明になっている。
- 15 教育哲学者の尾崎博美は、シェフラーの議論に拠りながら「『生と死』の学び」について理解の位相をていねいに切り分け、さらにそれが「文脈に埋め込まれた営みとして『教える』を展開・転換する可能性」についても示唆している（尾崎博美「『生と死』について学ぶことの意義とは何か——「わかる」ことのもろろ性に基づいて」『死生学年報』第15号、東洋英和女学院大学死生学研究所、2019年、170頁）。
- 16 それぞれの教科書会社で教科書本体の分量に大きな違いはないが、しかしポートフォリオを含めた「付録」の違いが目立つ。この「付録」を含めて中学校の道徳教科書の「問い」を腑分けした論文として、深澤広明ほか「道徳科授業における問いの研究」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第64巻、2018年、114-125頁、がある。深澤らは道徳教科書の問いの機能を共感的、分析的、自己投影的、批判的、主題追及的、問題解決的に分類して問いの在り方の比較を試みている（同、116頁）。
- 17 星裕「道徳教科書における出版社別教材配当の特徴」『北海道教育大学紀要 教育科学編』第72巻1号、2021年、54-56頁。
- 18 同論文、56頁。すなわち、文科省により「指導内容の重点化」項目として総則第1章に示された以下の記述に対応するのという指摘である。「各学校においては…、自立心や自律性を高め、規律ある生活をする、生命を尊重する心や自らの弱さを克服して気高く生きようとする心を育てること、法やきまりの意義に関する理解を深めること、自らの将来の生き方を考え主体的に社会の形成に参画する意欲と態度を養うこと、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重すること、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けることに留意すること。」『中学校学習指導要領（平成二九年告示）解説 特別の教科 道徳編』文部科学省、2017年、165頁。しかしこの総則の記述はむしろ主としてCの各項目に目配りしたものであり、ここで「生命の尊さ」についての教育内容が相対的に重視されている背景を説明するものではないのではないか。詳述は措くが、こうした傾向の直接の背後には、おそらく「いじめ自殺問題」への対応という教科化のトリガーにもなった事象にたいする文科省の問題意識を考察することができるのではないだろうか。
- 19 池谷壽夫「中学校『特別の教科 道徳』教科書（2021年度）の特徴と問題点」『民主教育研究所年報』第20号、2020年、88-89頁。同論文で池谷は日本の道徳科教科書の内容について、自己責任論や個人主義的ネオリベリズムに通じる考え方が含まれており、知的な裏付けをもたない「心情主義」に墮するものではないかと厳し

- く批判を加えている（同論文、97頁）。
- 20 2020年の検定では学校図書が撤退して7社となった。なお各会社の小学校の道徳教科書の内容構成についてはすでに平田繁がていねいな整理をおこなっている（平田繁「小学校道徳教科書における指導内容取扱い数」『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第10号、2019年、93-101頁）。平田の整理によると、東京書籍や光文書院をはじめとして、小学校でも中学同様にD[生命の尊さ]の項目の教材が数としてもっとも多く配置されていることがわかる（同、95頁）。平田は各社が同項目を重視することの理由に、「教科化の大きな背景として「いじめ、自殺」が関係していると考えられる」との推論を示しているが（同、97頁）、これは本稿の見通しと重なるものである。ほかに小学校の道徳教科書を対象として部分的なテキスト分析（3社の小学校の道徳教科書における〈徳〉という文字の頻出度のカウント）をおこなったものに、佐藤翔亮「問いを閉ざす道徳教科書：テキスト分析から見る道徳教科書の構造」『早稲田大学教育学会紀要』第20号、2019年、54-59頁がある。
 - 21 中学校の道徳教科書の採択率については、東京書籍が34.8%、日本文教出版が25.3%、光村図書が16.0%、教育出版が10.1%、学研教育みらい5.7%、廣済堂あかつき5.4%（cf. 末澤奈付子・山内乾史「『道徳教育』研究の社会的考察」『神戸大学 大学教育研究』29号、2021年、42頁）。
 - 22 もっともここでは編著者のクレジットにおいて大学に所属を持つと記載されていた編者を機械的に「研究者」として数えてしまっているので、厳密にはいくぶんのズレがあると思われる。
 - 23 日本文教出版で採用されているマザー・テレサについての文章とまったく同じものが、廣済堂あかつきの教科書で他項目に該当する資料として掲載されている。また間接的に[生命の尊厳]のテーマにふれていながらやはり他項目に対応する教材として複数の教科書会社が採録しているものに、第二次世界大戦中にリトアニアでユダヤ人にビザを発行し続けた外交官・杉原千畝をめぐる「6000人の命のビザ」の物語と、ips細胞の研究に尽力している山中伸弥のエピソード等がある。
 - 24 文科省は『学習指導要領 解説』で同項目の「指導の要点」として、「指導に当たっては、まず、人間の生命のみならず身近な動植物をはじめ生きとし生けるものの生命の尊さに気付かせ、生命あるものは互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の念をもつよう指導することが重要な課題となる」と強調している（『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』文部科学省、2018年、63頁）。
 - 25 民法第7章第1節に以下の条文がある。第961条「十五歳に達した者は、遺言をすることができる。」
 - 26 「ドナー」『自分をのばす 3』廣済堂あかつき、2021年、88-90頁。「臓器ドナー」『あすを生きる 3』日本文教出版、2021年、137-139頁。
 - 27 『自分をのばす 3』廣済堂あかつき、2021年、90頁。この教材にたいし先述の池谷は「賛否の意見が掲載されているが、脳死と臓器移植に関する知識は提供されていないため…生徒は解答しようがない」と批判的に指摘している（池谷、前掲論文、2020年、97頁）。
 - 28 『あすを生きる 3』日本文教出版、2021年、139頁。同付録「道徳ノート」25頁。
 - 29 大谷いづみ「『生と死の教育』のポリティクス：『生と死の語り方』を再考する」『死生学研究』第5号、東京大学大学院人文社会系研究科、2005年、201-202頁。
 - 30 大谷、同論文、203頁。また別の論文で大谷は以下のようにその問題意識を吐露している。「私が『生と死の問題群』を教育の場で扱うこと、つまり、自分の行って来た授業にある懸念を持つようになったのは、まさにこの点にある。生命倫理の授業のまとめとして『尊厳死の考え方が広まるにつれて、老人や重度障害者が、生きていることを引け目に感じるようになるのではないか』という趣旨の新聞記事を題材に小論文を求めた際、『生命の質が低くなった老人や重度障害者が、社会や家族への負担をへらすために自ら死を選ぶべきだと考えるように援助することこそが、進化した社会である』と論じた、まさにシンガー流の『新しい倫理観』を体現した答案を発見したときの驚愕。そのような趣旨で書く生徒が、やがて一人や二人ではなくて来るのではないかという不安」（大谷いづみ「生命『倫理』教育と／の公共性」『社会科教育研究』第92号、日本社会科教育学会、2004年、74頁）。
 - 31 斎藤隆介「ひさの星」『道徳 中学校3 生き方を創造する』日本教科書、2021年、150-153頁。
 - 32 同様に「定番教材」のひとつとして知られる三浦綾子著『塩狩峠』においても、暴走した列車を止めるために線路と列車のあいだに自ら飛び込んだ鉄道職員・永野信夫の自己犠牲について議論をおこなうなかで、場合によっては児童・生徒らが信夫の行いは模倣すべき『道徳的』なものであったというメッセージを受け取ってしまうかもしれない。
 - 33 鎌田實「誰かのために」『中学生の道徳 自分をのばす3』廣済堂あかつき、2021年、25頁。同『道徳中学校1 生き方から学ぶ』日本教科書、2021年、168頁。
 - 34 内田麟太郎「泣きすぎてはいけない」『中学道徳2 きみがいちばんひかるとき』光村図書、2021年、159頁。
 - 35 ほかに『道徳 中学校3 生き方を創造する』日本教科書、2021年では、22歳の時にバスの事故にあい半身麻痺になったエッセイスト・大石邦子が、事故の19年後自分の講演を聞きに来た女子高校生とやりとりを交わすエピソードが『生命の尊重』の教材として採録されているが、その最後のシーンでは「健康だったら、彼女ぐらいの子供があってもおかしくない。「私も、おばさんになっちゃった。あなたみたいな子供がいたらよかった……。」本当にそう思っていた。」（同、163頁）という呟きが表示される。もちろん著者の偽らざる切なる思いではあろうが、こと子どもたちに向けた教材の取り扱いという面においては、「健康でなければ子どもは産めない」とかそもそも「子どもを産んだ方が女性として良い人生である」といった価値の方向付けが授業のなかに無防備に含まれてしまっていないか、議論の流れを反省的に見すえ教材を扱ってゆくバランスの妙が問われよう。
 - 36 『中学生の道徳 自分をのばす3』廣済堂あかつき、2021年、25頁。
 - 37 『中学道徳2 きみがいちばんひかるとき』光村図書、2021年、160頁。
 - 38 Biesta, Gert. *Learning Democracy in School and Society*, Rotterdam: Sense Publishers, 2011, p.94. = 『民主主義を学習する』上野正道ほか訳、勁草書房、2014年、206頁。